

The John Hartford String Band "Memories of John"

WWJHD?

ティム・オブライエン

ジョン・ハートフォードはガチガチのフラット&スクラッグス・フリークで、同郷のミズーリ人作家のマーク・トウェインと同じように、スチームボートを愛した。彼は滑稽な短い唄を作り、フィドルやバンジョー、ギターを弾き、唄いながらダンスを踊った。"Gentle on My Mind"のほかにも一曲も作ることがなかったとしても、彼は20世紀でもっとも偉大なソングライターのひとりとみなされただろう。彼の音楽はまさに最先端にせまっていた。

黒のボウラー・ハットをかぶり、なんとも不思議なやりかたにしたがってファイルされた3 X 5インチのメモカードを、ヴェストのポケットにいつももっていた。彼は、スモザーズ・ブラザーズからノーマン・ブレイクやベニー・マーティンまで、あらゆるひとびとの助力を得て、トラディショナル・ブルーグラス・ミュージックを自らのものへと作り変えた。彼が愛してやまなかったミシシッピ川が、三日月湖を形成したり既定の州境界線を混乱させたりしながら、時と共にその流れを変えていったように、ハートフォードはいつも、最初にやりはじめたものとは異なるかたちをブルーグラスのなかに残していった。伝統を新しいテクノロジーや楽器演奏のテクニック、そして新しい主題と結びつけた彼は、この音楽が新たな聴衆を獲得することに貢献した。グレン・キャンベルがTVショウのテーマ・ソングを唄う、そのうしるでバンジョーを弾いていたのっぽが彼だった。スコットランドのグラスゴーでサウンド・チェックの合間にこれを書きながら、ギタリストのマーティン・シンプソンにジョンについて聞いてみた。彼は愛情を込めてこういった。「彼はいつも、信じられないくらいに風変わりな感じだった。どこか遠いところで、妖精と一緒にいるみたいだった」。

みんなと同じように、わたしもジョン・ハートフォードが好きだ。彼が亡くなる直前、彼もわたしのことを好きだといってくれた。彼がわたしに、自分の葬式で"Gentle"を唄ってほし

い、といってくれたことはとても名誉なことであり、いまでも大切に受け止めている。あの曲を唄うと、わたしの心、魂に彼が戻ってきて、大いなる喜びを感じ、力づけられるのだ。彼のスピリットとその音楽を生き続けさせることは、わたしの仕事の一部となっている。このアルバムのレコーディングで、わたしは新たに2曲のハートフォード・ソングを自分のレパートリーとすることができた。

ジョンの晩年に彼のバックを務めた素晴らしいバンド、ジョン・ハートフォード・ストリング・バンドのメンバーたちとのプロジェクトの一員として招いてくれたプロデューサー、クリス・シャープに感謝している。マイク・コンプトンはいまこの時代、最高に素晴らしいマンドリンのバックビートを奏で、クリス・シャープがレスター・フラット・スタイルのリズム・ギター、そしてマーク・シャッツが躍動するベースと跳ねるようなボウラー・ハットにツー・トーン・カラーのダンス・シューズで完成させるリズム。それに加えて、幅広タイの奇矯なバンジョー・エース、ボブ・カーリン(彼もまたツー・トーン・カラーのシューズ)と、怖いもの知らずのフィドラー、マット・コームズがいて、ジョンの音楽がどんなものだったのか、そのすべての様相がここに見られるのだ。このメンバーたちが入れ替わるようにしてジョンの曲を唄っていく。アラン・オブライアントの唄も、さらには歌詞を伴わない貴重なデモ・カットで、ジョン自身のハミングと口笛まで聴くことができるのだ。ジョンは決して亡くならない、その物理的な仕事をわたしたちに託していったのだ。彼がわたしたちのあいだを駆けまわっているのをいまも感じることができるのが嬉しいのだ。わからないことが出てくれば、わたしたちはこのシンプルな略語を思いおこせばいいのだ、WWJHD? What would John Hartford do?「ジョン・ハートフォードならどうするだろう?」

ジョンの音楽でフレッシュな一服を、というときはこのCDを聴きなさい。効果観面だ。

ジョンの思い出

クリス・シャープ

ジョン・ハートフォードのファンの人たちから、ジョンのことについて話してくれないかと頼まれることが何度もあります。そんなとき、わたしはあまりにも多くの場合、話すことができずに終わってしまうのです。話すことがないからではなく、多すぎるからなんです！どちらかといえば、きわめて多くの物語、経験したこと、教えられたこと、そしてわたしたちの友情からきていることを認識し始めたところなのです。ジョンを知ることのできた多くの人たちは、彼がとても実際的でとっつきやすい人物だったことに気付いているでしょう。彼はファンの人たちや友人たちを愛し、彼らもまたジョンのことを愛しており、いまでもそうなのです。わたしはここでジョン・ハートフォードのバイオグラフィを記そうとは思っておりません。彼がこれまでステージに立ったエンターテイナーたちのなかでもおそらく最高のひとりであり、新しい独創的なアイデアに満ち溢れており、わたしが知る誰よりも音楽を愛していた、というだけで十分なのです。

このCDを制作することを決心したとき、あらゆるサポートが寄せられたことに驚かされました。ミュージシャンたち、わたしたちが所有していなかった機器の数々　ジョンのバンジョーや多くのマイク、プリアンプ等々　を貸し出してくれた人たち、ファン、そしてジョンのファミリーが、わたしの夢を現実のものとするのに協力してくれました。振りかえってみると、関わりを持った誰もが、ジョン・ハートフォードの思い出を持ちつづけ、ジョンの音楽と人格を映し出した曲を再現することを望んでいたことが、容易にみとれるのです。

最終的にスケジュールがまとまり、録音を始めるときがやってきました。わたしは自分のスタジオの機材(と、いくつかの借り物の機材)を積み込み、ナッシュヴィルへと向かいました。マット・コムズのおかげで、彼が教えているミュージック・スクールの空き教室を使うことができました。3人のオーヴァー・ダブ(アリソン・ブラウン、ベラ・フレックとアイリーン・カーソン・シャッツ)を除いて、すべてのレコーディングは2日半をかけて「スタジオ・ライヴ」で終了しました。

このアルバムのためにわたしが選んだ何曲か

は、ジョン・ハートフォードのファンには親しみのあるものかもしれませんが、ほかの曲はジョンの内輪のもの以外には滅多に聴かれることのなかったものです。その多くは彼が作ったものですが、レコーディングはしなかった曲です。このプロジェクトのプロデューサーに当たってわたしは、ジョンの音楽を自分なりに忠実に解釈することに勤めました。ある曲について決めるときには、ティムのサジェスションに従って、「こんなとき、ジョン・ハートフォードならどうするだろうか？」と自問するのが、第2の自然な成り行きとなりました。

それぞれの曲についてのノートには、ジョン・ハートフォードのオリジナル・ヴァージョンが収録されたCDのタイトルを付記しています。そのCDはすべて、ジョンのファミリーが愛情を持って運営しているジョンのウェブサイト、www.johnhartford.comで入手可能です。このウェブサイトはジョン・ハートフォードのことをもっと知ることのできる、素晴らしいサイトです。そこには、みんなが彼に関するいろいろな話やアイデアを交換することのできるフォーラムまであるのです。

このレコーディングを通して皆さんがジョンがいまも生きていることを感じ、いままで聴いたことのない「新しい」曲を楽しんでくれることを切に願っております。ストリング・バンドのみんなとゲスト・アーティストの皆さんが、そのパフォーマンスについてわたしを信頼してくれたことを誇りに思っています。とても貴重な経験であり、決して軽くやり過ごすことはないでしょう。

ツアーで皆さんと会いましょう！

ハートフォード・ストリングバンド メンバーたちの紹介

ボブ・カーリン

1953年ニューヨーク・シティ生まれ。五歳のときにピート・シーガーのコンサートでバンジョーに興味を覚えたものの、その後フォークやブルースのギターを弾いていたが15歳のときオールドタイム/クロウハンマー・バンジョーも弾きはじめる。1975年に初めてバージニア/ノース・カロライナに行き、「行きはギター奏者で帰りはバンジョー奏者」になっていたという。南部アパラチアで見た音楽、とくにトミー・ジャレルやフレッド・コッカラムに接したことがボブの世界を一変させたようだ。



1977年のデビュー作『Melodic Clawhammer Banjo』や79年にラウンダーから発表された『Fiddle Tnes for Clawhammer Banjo』は、その繊細なクロウハンマー奏法で多くのブルーグラス・バンジョー奏者にあたらしいバンジョーの世界を紹介した。その後クロウハンマー・バンジョーの達人として数多くのアルバムを発表し、オールドタイム音楽の魅力を紹介しつつけるミュージシャン/プロデューサーである。ブルーグラス以前のバンジョー研究家としても知られ、「From Africa to America」というプログラムでは西アフリカのバンジョー・ルーツからアメリカの minstrel ショウ、そして南部のオールドタイムに至るバンジョーの歴史を見せる。また2007年にマリ共和国のシェイク・ハマーラ・ジャバータビとのアルバム『From Mali to America』は同年のグラミー・ノミネートを獲得している。

1989年にバージニア州レキシントンに移り住み、マイク・シーガーもいたそこを拠点にジョン・ハートフォードが亡くなるまで6年間、ジョンの片腕的存在で、1995年の日本ツアーにも同行している。

バンジョーという楽器がブルーグラス以上の魅力を持っているものだという事を知らしめた最大の功労者であり、ハートフォード・ストリングバンドのメンバーとなったことで広がったブルーグラスとオールドタイムの交流を、フィドラーでシンガーソングライターでもあるマーク・サイモスとともに積極的に進めている。現在の若者スーパーピッカーたちにオールドタイムの意義と感動を伝える導師のひとりでもある。

マット・コームズ

1997年、ミシガン大学の音楽学士号をバイオリンで取得したのちナッシュビルに移住。ジミー・マーティンをはじめ、数々のブルーグラス/カントリー・バンドを経験、バンダービルト大学ブレイク音楽校のフィドル主任を務めながら、マーク・オコナー・フィドル・キャンプほか、

さまざまなワークショップやクリニックの講師などを歴任、2006年からはナッシュビル・シンフォニーとカントリー名誉の殿堂博物館との教育プログラム"Is It Fiddle or Violin?"を主宰している。

ジョン・ハートフォードから音楽の極意を学び、ジョンの自主レーベルから『Devil's Box』を発表している。現在はグランド・オール・オープリのメンバー、マイク・スナイダーとの活動やナッシュビル・マンドリン・アンサンブル、カントリーシンガーのレイ・プライスやエリザベス・クック、また9人のナッシュビル・フィドラーからなる「ザ・ドリブン・ボウ(The Driven Bow)」などのバンドで活躍している。ちなみに、ジミー・マーティンの赤裸々な自伝的DVD『King Of Bluegrass - The Life And Times of Jimmy Martin』撮影時のバンド・メンバーで、バスの中でジミーに怒られるという名誉な!?役回りを演じている……。



マットのこれまでの活動で特筆すべきはマイク・スナイダー・ストリング・バンド。アルバム『Mike Snider String Band』は、マイク(bj,m)とチャーリー・クッシュマン(g)、テリー・スミス(bs)をバックにシャッド・コップとのツイン・フィドルが"MISIP"をはじめ、ジョン・ハートフォードがサウンド・エンジニアでギタリストのマーク・ハワードとともに『Cadillac Rag』で提示したブルーグラス/ニューグラス・フィドル・バンドの理想的な演奏を聴かせている。ジョンがあれば伝えようとしたオールドタイム・フィドルの真髄を知り、その伝承者として、かつ現代のエンターテイメントとしても十分に楽しめるサウンドを創り上げている。

マーク・シャッツ

1955年音楽一家に生まれ、10歳からチェロを学んだのちベースに転向、1971年に高校のロックバンドでエレキベースでデビューののち、トラディショナル音楽に興味を持ちマンドリンとギターを弾きはじめる。1973年からフィラデルフィア郊外のヘイバーフォード芸術大学で音楽理論と作曲の学位を取得、1975年からボストンのマンダラ・フォーク・ダンス・アンサンブルに参加しクログ・ダンスやオールドタイム・バンジョーを学びはじめ、パークリー音楽院で1年間学ぶ。1977年にベラ・フレックと出会い、ジャック・タトルのテイスティー・リックスに参加、アルバム2枚を残し1980年、ベラとともにケンタッキーに移住してスペクトラムに参加、解散アルバムマット・コムズとなった1981年来日の模様を収めたライブ盤『Live in Japan』を含めて3枚のアルバムを発表。



1982年からナッシュビルに移りスタジオやライブツアーで活躍、1985年から5年間トニー・ライス・

ユニット、1990年から8年間ティム・オブライエン & オー・ボーイズ、そして1999年からジョン・ハートフォード・ストリングバンドの最後の2年を過ごしている。2003年4月から2007年まで、ティーン・アイドルだったニッケル・クリークにも参加、その後クリア・リンチ・バンドに加入している。また、トニー・ライスらのブルーグラス・アルバム・バンドでの録音活動や、サム・ブッシュらのブルーグラス・オールスターズでのライブもよく知られている。一方、大好きなクログダンサーとして、フットワークス・パーカッシブ・ダンス・アンサンブル(来日もした元フィドル・パペット・ダンサーズ)には1989年以降、現在も参加、1993年からはミュージカル・ディレクターとロード・マネージャーを兼ねている。

1986と87年にフレッツ誌最優秀ブルーグラス・ベース奏者、1991年にはブルーグラス・アルバム・バンド『Volum 5』、1992年ジェリー・ダグラス『Slide Rule』でIBMA最優秀インスト録音、1994と95年にはIBMA最優秀ベーシストを受賞している。1995年に初のソロ『Brand New Old Tyme Way』、2006年には2枚目ソロ『Steppin' in the Boilerhouse』を発表、あたらしいオールドタイムノアパラチア音楽として、ともにブルーグラス・リスナーからも非常に高い評価を受けている。



マイク・コンプトン

1956年、ジミー・ロジャーズと同じミシシッピ州メリディアン生まれ。祖父がフィドラーだったこともあり幼くしてオールドタイム音楽になじみ、15歳でマンドリンを手にする。ビル・モンローのマンドリンと、土地柄でもあるブルースに深く傾倒する。

1977年、ナッシュビルに移り、ヒューバート・デイビスのシーズン・トラベラーズで3年半、毎週6日間ブルーグラス・インをはじめとするクラブ出演を続け、3枚のアルバムに参加する。1985年、ナッシュビル・ブルーグラス・バンド(NBB)に結成時から参加、88年まで4枚のアルバムに参加する。NBBは1986年6月、中国へのツアーの帰路、日本に立ち寄りコンサートしている。

1990年ころからジョン・ハートフォードとの活動がはじまると同時に、一方でマイクはデビッド・グリアとのコラボで全米や日本をツアー、デュオ作品『Climbing the Walls』('89)を発表している。グリアとのコンビは10年あまりつづくが2000年秋、ナッシュビル・ブルーグラス・バンドからローランド・ホワイトが抜けることとなり再加入を求められ、躊躇することなく参加。翌2001年、NBBも参加した映画サントラ『オー・ブラザー!』が700万枚を越えるヒットとグラミー最優秀レコードなどを獲得、つづく『Down From the Mountain』ツアーで「オー・ブラザー現象」と呼ばれるルーツ音楽リバイバルの渦中に参加、プロデューサーのT.ボーン・バーネットのプロジェク常連となり、ビル・モンローとカントリーブルースを

極めて大成する。

2006年には同じモンロー・スタイル・マンドリニストのデビッド・ロングとのデュオ『Stomp』を発表、テナーギターにも新境地を開いている。モンロー・マンドリン・スタイルを軸としたマンドリン・レッスンにも定評があり、さまざまなミュージック・キャンプでも活躍している。昨年はエルビス・コステロの『Secret, Profane & Sugarcane』でバンド・メンバーとして参加、ツアーもこなしている。

クリス・シャープ

1973年、ノース・カロライナ州アッシュビル生まれ。5歳でピアノをはじめも挫折!?...11歳のときフィドルとバンジョーを学びはじめ。母方の祖父バーナード・バーストンはソースマン・ブラザーズや、一時期ナッシュビルでベニー・マーティンらとビッグ・ジェフ・バンドにも参加したことがあるというフィドラー。10代で同郷のジョージ・バックナーとバンドを結成、ここでフラット&スクラッグス・フリークのジョージからベニー・マーティンとレスター・フラットの真髄を学んでいく。



1993年、海軍に入隊しカリフォルニアで過ごしたのち95年に除隊、ジョージ・バックナーとケビン・スルーダーとともに(現在のティプトン・ヒル・ボーイズ)ナッシュビルに移住、フラット&スクラッグス・フリークつながりで人脈を形成し、ジョッシュ・グレイブス&ケニー・ベイカーのバックアップに雇われるが、あまり仕事がなく2年あまりで揃ってアッシュビルに帰郷する。

しかしクリスはすぐにナッシュビルに戻り1997年、ジョン・ハートフォードに認められてハートフォード・ストリングバンドに参加、フラット&スクラッグス・フリークのジョンをして「Flatt by Sharp(シャープによるフラット)」と言わしめる。その後ジョン最後の4年間をともにツアーした。上記マイク・コンプトンとともに映画サントラ『オー・ブラザー!』に参加、主題歌「I'm A Man of Constant Sorrow」にも参加して、グラミー賞とIBMAアワードを受賞している。今年4月発売予定のウィリー・ネルソン最新作『Country Music』に参加している。

1999年、日本のレッド・クレイ・レコードからデビュー作『Good Fa-Air Side』を発表、ジョンはもちろん、アール・スクラッグス、ケニー・ベイカー、ジョッシュ・グレイブスらブルーグラス第一世代の偉人たちが参集した名盤である。ソロの第2作はジョージとケビンにステュアート・ダンカンとマイク・コンプトンを迎えた『Working It Out』('08)、またティプトン・ヒル・ボーイズとして『Lucky』('03)と『Songs We Like』('09)を発表している。

2002年の日本ツアーで出会った小池佐知江さんと2003年3月に結婚(Sachieさんは本誌コラム「ふらっとシャープ」執筆中)、現在は東テネシーのジョンソン・シティに自宅スタジオを作ってレコード制作に励んでいる。

(ムーンシャイナ―誌2010年4月号より)

Red Clay Records RC-125

The John Hartford String Band
"Memories of John"

曲目解説

クリス・シャープ

Start of CD

- John talking - "Reckon we ought to take just a listen to a little bit of it and just kinda see...make sure the boat's in the channel?"

1. Three Forks of Sandy

ジョンがストリング・バンドの殆どのショウのオープニングで演奏した、素晴らしいフィドル・チューン。エド・ヘイリーから学んで、アルバム『The Speed of the Old Long Bow』に "Forks of Sandy" というタイトルで録音している。マイクとボブはどちらもそのヴァージョンでジョンと共演している。

ストリングバンド

2. MISIP

このアルバムのために2番目に録音された曲。インストゥルメンタル・ナンバーとしても、ヴォーカル盤同様に見事なものとなっており、ジョンのソングライターとしての素晴らしい才能を証明する一例である。ティム・オブライエンがそのヴォーカルに注ぎこんだエモーションを見過ごすことは難しい。ジョンの思い出があまりにも多く詰まっているこの曲を唄うことは、ティムにとっては容易なものではなかっただろうが、それこそがこのプロジェクトがかくありたいとしたことなのだ。ジョン自身のバンジョーの一台(マーク・ハワードの好意によるもの)を弾いたアリソン・ブラウンもまた、ジョンと彼の音楽への深い感謝の念を表しており、彼女とのレコーディングに際しては、彼女のジョンへの敬意と深い想いに感動させられた。ジョンの唄入りでは『Goin' Back to Dixie』、インストゥルメンタルではボブ・カーリンとの『The Fun of Open Discussion』で聴くことができる。

ストリングバンド、ティム・オブライエン(ヴォーカル)、アリソン・ブラウン(スリー・フィンガー・"ジョン・ハートフォード・スタイル"・バンジョー)

part 1:

That big stern wheeler coming up the creek
Make my eyes start to water and my knees get weak
The big ole whistle when it starts blow
Says come on it's time to go

Well I want to be planted when I die
Where I can see the steamboats paddling by
Cause all I ever wanted since ten years old

Was to pick and ride an old boat

Now see that pilot at the wheel
Shaving shoals on 12 inch keel
I hope someday that he'll be me
On the MISIP

part 2:

Now see that pilot at the wheel
Shaving shoals on 12 inch keels
I hope someday that he'll be me
On the MISIP

3. LOVE GROWN COLD

ジョンはたぶん、ほかのどんな "ブルーグラス"・ヴォーカル・ナンバーよりもこの曲を愛していた。この曲もまた、わたしたちが演奏しなかったショウは滅多になかった、そんな曲のひとつ。このアレンジメントは、ジョンのツアー・キャリアの最後の数年の間に進化していったものである。ジョンは、マイク・コンプトンの常に変化をみせる驚くべきソロ・パートに、決して飽きることなく聴きいていた。ジョンとジェイミー・ハートフォードが『Hartford and Hartford』で録音している。**ストリングバンド、クリス・シャープ(ヴォーカル)、マイク・コンプトン(ハーモニー・ヴォーカル)**

chorus:

Now your love has done grown cold
I've no one, to ease my wearied soul
I'm alright, I've found my only goal
Love Grown Cold

verse 1:

What have I ever done to you
That makes you treat me like you do
Don't leave me here to grieve my soul
Love Grown Cold

chorus:

Now your love has done grown cold
I've no one, to ease my wearied soul
I'm alright, I've found my only goal
Love Grown Cold

verse 2:

I need you here in the cold
For your love means more to me than gold
What have I to share when I grow old
Love Grown Cold

chorus:

Now your love has done grown cold
I've no one, to ease my wearied soul

I'm alright, I've found my only goal
Love Grown Cold

chorus:

Now your love has done grown cold
I've no one, to ease my wearied soul
I'm alright, I've found my only goal
Love Grown Cold

Hartford talking - This is not gonna be a show stopper. We're gonna we're gonna do I wanna do this, I wanna do this like it was a "Brush Fork of John's Creek". It's, I'm, It's gonna be, I'm gonna, It's gonna be straight ahead with allegiance to the music and not tricky.

4. MADISON TENNESSEE

ストリング・バンドがアルバムのためにリハーサルしていたが完成には至らず、未発表に終わっていた曲。ジョンが、自分の住んでいたナッシュヴィル郊外の町、マディソンについて作った。録音するのが楽しかった曲で、もともとのソング・リストにはなかったけれど、バンドのみんなの圧倒的な賛成で収録することになった。

ストリング・バンドのツアー中のバスの中でジョンがこの "Madison" を書き上げるのを見ていたことを、ボブはよく覚えている。最初のヴァースにある "Bloodshot nose" は、ジョンが鼻の手術を受けたあと、"キャプテン・クリネックス" とでもいうべき状態にあったことを、また、2番の "Gallatin Road" は、ギャラティン・パイクから叫んだら声の届くところにあったテネシー州マディソンのジョンの自宅で書いたもの、そして、"Finger on a map" は、演奏を終えてバスで家に帰る途中、ジョンがひざに道路地図をひろげて家までどれくらいの時間がかかりそうかと計算していたときのことを唄にしている。3番の "Behind the firehouse" は、ジョンの近所に住んでいたラリー・パーキンズの家での伝説のジャム・セッションのことを唄っている。

ストリングバンド、マット・コームズ(ヴォーカル)、マイク・コンプトン(ハーモニー・ヴォーカル)

verse 1;

I ain't got ten dollars
Just these dirty clothes
And a rag I borrowed somewhere
To wipe my bloodshot nose
Left eye someone punched it
So now I barely see
To find my way back to my home
In Madison, Tennessee

chorus 1:

Madison's a good ole place
If banjo music is is your taste
Been living there since sixty three

In Madison, Tennessee

verse 2:

I haven't got a lot to say
I've got some kind of low
I can hear those horns a honkin'
Up on Gallatin road
I put my finger on a map
To the roads where I might be
To find my way back to my home
In Madison, Tennessee

verse 3:

Out behind the fire hall
Under a full moon
Fiddlers and banjo pickers
Crammed inside a room
Playing songs made popular
Back in 1943
Raising the roof in a little white house
In Madison, Tennessee

chorus 2:

Madison's a good ole place
If fiddle music is is your taste
Been living there since sixty three
In Madison, Tennessee

chorus 3:

Madison's a good ole place
If country music is is your taste
Been living there since sixty three
In Madison, Tennessee

5. DELTA QUEEN WALTZ

最初に収録曲のリストに入れた曲。ジョン・ハートフォードのオリジナル・ソングのなかでの、わたしの個人的フェイヴァリット・ソング中、紛れもなくトップに近いところにくるもの。わたしが考えるに、この曲のヴォーカルにはアラン・オブライアントしか選択肢はなかった。実際、彼はこの曲をジョンの葬儀で唄い、そのパフォーマンスはわたしがその日のことで記憶しているいくつかのなかのひとつとなっている。ジョンはこの美しいワルツを『Down on the River』で録音している。**ストリングバンド、アラン・オブライアント(ヴォーカル)**

part 1:

Oh we boarded the boat
On the breast of the river so wide
And we left old St. Louis
On the crest of that brown muddy tide
To the strings of the Delta Queen's band

I found myself holding your hand
The way we had hoped we would do
All that summer and fall

Oh the whistle came out
Such a deep mellow sound
In the night
And the echo came back
>From the shoreline of twinkling lights
There was nothing we really could say
The river had swept us away
Like a present hereafter
The warm sound of laughter
As we danced to the Delta Queen Waltz

part 2:

As the big wheel keeps rolling
I find myself holding you near
With the night time unfolding
I'm lucky just having you here
As a single wave curls down the shore
We're waltzing away cross the floor
As our heartbeats assemble
The boat slightly trembles
As we dance to the Delta Queen Waltz

6. FOR JOHN

マーク・シャッツが最後にジョンに会いにいったときに作った美しい詩。その心の底からの想いとマークの朗読が、ミュージシャンとして、また人間としてのジョンへのマークの愛情を表現し、わたしたちの想いをも映し出している。

マーク・シャッツ(ヴォーカル、フィート)

I pull the string and make a noise
You pull the bow for all the boys
And girls and all who'd lend an ear
To hear the world you make appear
A dance hall or a riverboat
You build the rhyme and make it float
One for them and one for you
You take the old and make it new
Your words they weave such colorful tales
The notes they are a winding trail
The groove is kind and oh so deep
It beckons to the dancing feet
To me you are an open door
So never are the notes a chore
You may follow or you may lead
But in the end we're all set free
So here I stand to sing your praise
You'll be with for all my days
It's through your window I can see
And I'll crack my heel for the family

7. Homer the Roamer

ジョンのオリジナル・フィドル・チューンで、この複雑な曲だけはレコーディング・セッションでチャートを用いた。ジョンの演奏を聴くことが喜びだった人たちには、この曲はお気に入りとなっていた。この数年、多くの人たちからこの曲がどのレコードに入っているのかと尋ねられたが、わたしの知る限り、これが初めてのレコーディングである。

ジョンはブルーグラスの父ビル・モンローからフュージョン・ジャズ、オールドタイム・フィドル・チューンから古きよきロックンロールまで、きわめて多方面にわたる音楽を好んだ。この曲は、彼のケルト音楽への愛情を映し出しており、タイトルは作家オグデン・ナッシュへの賛美の念を示している。

ストリングバンド

8. BRING YOUR CLOTHES BACK HOME

ハートフォード・ファンにはスタンダードとなっているこの曲のごく自然な、あっさりとしたアレンジは、スタジオでのみんなの気持ちから生まれていった。ジョンの2度のレコーディングは、『Live at College Station Pennsylvania』とスタジオ録音の『Down on the River』に収められている。

マット・コームズ(フィドル)、マイク・コンプトン(マンドリン、ヴォーカル)、マーク・シャッツ(ベース、ヴォーカル)

verse 1:

Well mama killed a rooster
She thought it was a duck
She put him on the table
With his leg's a poking up
Oh babe, bout to lose my mind
Bring your clothes back home
And try me one more time

verse 2:

Well you know about kissing and loving down
You're the dreamiest girl that I've ever been around
Oh babe, bout to lose my mind
Bring your clothes back home
And try me one more time

verse 3:

She was coming down the stairs
Goin' oop shoop a doobie
I was sitting there digging all that
Flip flop de flubie
Oh babe, bout to lose my mind
Bring your clothes back home
And try me one more time

verse 4:

Well mama killed a rooster
She thought it was a duck
She put him on the table
With his leg's a poking up
Oh babe, bout to lose my mind
Bring your clothes back home
And try me one more time

John talking: Are we in tune, are gonna, are we in
tune and ready to play or not? (Chris) no, we're not
ready. (John) Ok, Stop her, shut her down.

10. LORENA

ステージでジョンがフィドルを置いてバンジョーを手にしたときには、決まってこの曲を演奏することとなっていた。紛れもないファン・フェイヴァリットとなったこの信じられないほどの名曲は、南北戦争の前に作られた。この曲が南北戦争終結をもたらしたとまではいわないが、その主たる要因のひとつとなった、とジョンはよく説明していた。ファンたちはこのジョン・ハートフォード・ストリング・バンドの新しいCDでどの曲を聴きたいのか、とわたしがいるんなウェブ・リストにボスティングしたとき、ほかのどれよりもこの曲への反応が大きかった。ジョージ・バックナーのバンジョー・ワークはジョンへの大いなる「敬意の表われ」である。ティムがこのヴァージョンでとりあげた、多くの場合カットされているリフレイン・パートが、わたしは大好きだ。この悲しい物語に、素晴らしいエンディングをもたらしている。ジョンはこの曲を4回録音している。最初は『Gum Tree Canoe』、続いて『Live at College Station Pennsylvania』と『Live from Mountain Stage』、そして最後はマーク・ハワードのサポートを得た『The Civil War Music Collector's Edition』。

ストリングバンド、ティム・オブライエン(ヴォーカル)、ジョージ・バックナー(スリー・フィンガー・"ジョン・ハートフォード・スタイル"・バンジョー)

verse 1:

Oh the years creep slowly by Lorena
The snow is on the ground again
The sun's low down the sky Lorena
The frost gleams where the flowers have been

chorus 1:

But the heart beats on as warmly now
As when the summer sun days were nigh
Oh the sun can never dip so low
To be down in affections cloudless sky

verse 2:

A hundred months have passed Lorena
Since last I held that hand in mine
And felt the pulse beat fast Lorena

Though mine beats faster far than thine

chorus 2:

The hundred months twas flowery May
When up that hilly slope we climbed
To watch the dying of the day
And hear the distant church bell chime

verse 3:

We loved each other then Lorena
Far more than we ever dared to tell
And what we might have been Lorena
Had our loving prospered well

chorus 3:

But then tis past the years have gone
I'll not call up their shadowy forms
I'll say to them lost years sleep on
Sleep on nor heeds life's pelting storms.

Chorus 4:

There is a future oh thank God
Of life this is so small a part
Tis dust to dust beneath the sod
But there up there tis heart to heart

11. YOU DON'T NOTICE ME IGNORING YOU

この曲は、1960年代中頃にジョンが録音したデモ・テープから発掘した、きわめて珍しいレコーディングである。当時、ジョンは曲作りに非常に多くの時間を割いており、おそらくは彼の出版社だったグレーザー・ブラザーズとの契約上の義務を果たすために、しょっちゅうスタジオに入ってただ座りこんで多くの曲を演奏していた。"Gentle on My Mind"はそのようにして「見出された」のだ。この曲がいつの日にかCDに収められることをジョンが夢見ていた、とはわたしには思えないのだが、この曲、そして彼のパフォーマンスは傑出したものである。マーク・シャッツとアイリーン・カーソン・シャッツのバック・アップもまた素晴らしい。それらのデモ・テープをリサーチすることを許してくれたジョンのファミリーにとりわけ感謝の意を表したい。そして、曲の所在を確認し、試聴するためにスタジオを使わせてくれたマーク・ハワードにも感謝している。

ジョン・ハートフォード(バンジョー、ヴォーカル)、マーク・シャッツ(ベース)

part 1:

I'm trying not to notice you while you're ignoring me
I'm trying not to look at you but trying hard to see
While hoping that you'll look amazed at all these things I do
But you don't notice me ignoring you

Bad scene
You don't notice me ignoring you

I'm trying not to listen see I've plugged up both
my ears

I'm absolutely oblivious to what I overhear
And while I'm hollering at the wall you do not hear
a word

Cause you don't know I'm even hear 'cept what
you've overheard
(no english for this noise)

part 2:

I'm trying not to notice you while you're ignoring
me

I'm trying not to look at you but trying hard to see
While hoping that you'll look amazed at all these
things I do

But you don't notice me ignoring you

Bad scene

You don't notice me ignoring you
(no english for this noise)

12. THE GIRL I LEFT BEHIND ME

ソロ・アクトとして活動していた期間、そしてバンド
を続けた期間をとおして、この曲はいつもジョンのそば
にあった。何回演奏したか、数知れない。誰もが唄うこ
とができ、やりたいと思うどんなふうにもできる、そ
んな曲のひとつ。ジョンが『Live at College Station
Pennsylvania』で演奏したやりかたに、すこしばかり活
気を添えて唄うことを選んだけれど、わたしたちはここ
で、ジョンの音楽と同様に彼のパーソナリティの全体像
を描き出すことに務めた。わたしが選んだ歌詞につい
て、まえもって母に謝っておきたい、、、。このレコー
ディングでは、ベラ・フレックの驚くべきバンジョー・
プレイも聴くことができる。ベラもまたジョンの大ファ
ンで、アリソンのときもそうだったように、わたしは彼
がこの曲を録音しているのをみつめていて、ジョンが送
りこんでくるエネルギーを感じ取っていたのだ。ジョン
は上記したアルバムに加えて、『Goin' Back to Dixie』
でも録音している。

ストリングバンド、クリス・シャープ(ヴォーカル)、ベ
ラ・フレック(スリー・フィンガー・"ジョン・ハー
トフォード/ベラ・フレック・スタイル"・バン
ジョー)

chorus 1:

Oh the girl I left
The girl I left
The girl I left behind me
If ever I cross that bridge again
I'll pick her up behind me

verse 1:

Last night I slept in a Sycamore tree
With the wind and the rain all around me
Tonight I'll sleep in a warm feather bed
With the girl I left behind me

chorus 2:

The girl I left
The girl I left
The girl I left behind me
If ever I cross that bridge again
I'll pick her up behind me

verse 2:

Oh she jumped into bed
And she covered up her head
And she swore that I'd never find her
But I knew damn well that she lied like hell
So I jumped right in behind her

chorus 3:

The girl I left
The girl I left
The girl I left behind me
If ever I cross that bridge again
I'll pick her up behind me

chorus 4:

Oh the girl I left
The girl I left
The girl I left behind me
If ever I cross that bridge again
I'll pick her up behind me

13. SHE'S GONE AND BOB'S GONE WITH HER

スタジオでこれほど楽しかったのは、まさに法外なこ
とだった！"She's Gone"は、わたしたちがワシントン
州ポート・タウンゼントを訪れたときにジョンが作った
もので、この曲もまたわたしたちがCDを作るうとして
完成させられなかったものである。晩年においてもジョ
ンはなおソングライターとしての力量を保っており、こ
れらの未発表作品はその証である、もしも皆さんがこの
曲を聴いて、わたしたちがレコーディングのときに楽し
んだ、その半分も楽しんだとしたら、皆さんも逮捕され
るのだ！

ストリングバンド、ボブ・カーリン(ヴォーカル)、
ストリングバンド(やじ)

verse 1:

Now Bob's got the hat and loud shirt
Bob's got the two tone shoes
Bob's got these great big balloony looking pants
Me I got the blues

chorus 1:

She's gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone and she ain't comin' back

Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone and she ain't comin' back

verse 2:

I dreamt I held her hand in mine
Traffic ran all down my spine
I could watch her eyes dance all around
Drive all over this town

chorus 2:

She's gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone and she ain't comin' back

Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone and she ain't comin' back

verse 3:

You know I tried to kiss her
I tried to hold her hand
But oh what a fool
I must have been
Bob's come around again

chorus 3:

She's gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone and she ain't comin' back

Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone, and Bob's gone with her
Gone and she ain't comin' back

(Mark Schatz) "Gentlemen, the clapping is coming through." (John) "Oh. Oh well. We need all the applause we can get.....alright" (Bob) "Please hold your applause til' later"

14 . Royal Box Waltz

このワルツを初めて聴いたときに好きになり、フェイヴァリットのひとつになった。ジョンが女王と一緒に「ロイヤル・ボックス」でオペラを鑑賞している夢を見て、この曲を作ったというもの。コード進行が実に美しく、マットはこの曲をジョンとベニー・マーティンのスタイルを織り交ぜた素晴らしい演奏で仕上げている。ジョンがゲスト参加したマット・コームズのソロ・アルバム『The Devil's Box』で録音している。

ストリングバンド

15 . Fade Out

"You Don't Notice Me Ignoring You"と同じソースから、この曲を発掘した。極めて珍しい未発表曲で、ジョンがこの曲ではただひとりのパフォーマーだったのでほうっておかれたもの。この曲については、このCDのエンディングに最適の曲である、という以外になにもいうことはない。

ジョン・ハートフォード(ギター、ヴォーカル)